

第十九章 奉天の宮殿

地平線から朝の太陽が昇つてくると、帰依住職は朝のお勤めの経を読み始めた。列車に乗り合わせている日本人たちが次々と訪れて焼香を済ませて行った。読経する帰依住職の両脇に座った菊宗政監督とほおでえ看護師は焼香する日本人客に深々と頭を下げ喪主気分だった。

この場に来ていないのは朝鮮人と中国人だろうとほおでえ看護師は思った。徹マンでコミンテルン三人を叩きのめした赤井五平も焼香の列に並んでいた。

「誰ぞ、もうならはったん？」

赤井五平は麒麟児母さんに聞いた。

「毎朝のお勤めでしょう。日本人なら当たり前！」

お経を読みながら帰依住職は思った。香炉をもつと用意しておくべきだった！朝鮮人と中国人を除き列車に乗っている全ての乗客が焼香に来るもんだから、時間がかかりすぎて二巡目のお経を読まねばならなかった。

朝の読経が終わると列車の中は次第ににぎやかになって来た。とろろん娘は食堂車で中岡三世料理長の手伝いを始めた。

幹部車両では舞子売中佐が一升瓶を手に朝のお勤めを始めたので、とろろん娘は食堂車に逃げて来たのだった。

ほおでえ看護師は、朝のお勤めの時に焼香に来ていた、全身包帯だらけのミサオちゃんが気になったので、菓の入った巾着を持って様子を見に行った。

「治りかけているし、熱もないから菓出しとくね。それでダメな時は連絡してね。」
廊下では帰依住職が待っていた。

隣のコンパートメントを除くと、清美とシオリと蓮舫が雀卓に突っ伏して眠りこけていた。

「こいつら日本人じゃなかったんだ！」

ほおでえ看護師は思った。

朝の宴会が始まった将校たちの車両にいても居場所がない阿保野論気二等兵は昨日、未造技師たちと車両の末尾まで乗員検査に行ったので、今度は昼間の車両内部も眺めてみようと、一番最後の車両まで散策に行くことにした。

廊下の左側にはコンパートメントの部屋が並び、右側の窓からは行けども行けども行けども更に行けども変わらない平原の景色が広がっていた。

車両の最後尾は通常の客車で、屋島君たち乗務員が乗っていた。

「おはようございます兵隊さん。朝の巡視ですか？」

「え？ええ、まあ、そぎゃんとこですばい。こん扉の向こうはどうなってるんか？」

屋島君は扉を開けて阿保野論気を案内した。

「こうして、ちよつとしたデッキになっています。外の風に当たるともいいもんでしょう。阿保野論気はこの最後尾車両の後ろに申し訳程度に連結されたもう一台の車両が気に

なつて屋島君に質問してみた。

「何やらわけの分からない連中が乗っている車両で、このように前の車両には来られないようになっておりますのでご安心ください。」

車両に戻る時に阿保野論氣二等兵がぶら下げていたカバンが棒のような物に引っかかったので、無理やり引つ張つたら簡単に外れた。二人はそのまま車両の中に戻った。

阿保野論氣二等兵がひっかけた棒は、後ろの車両と連結している連結器の解除レバーだった。コンテネルたちの乗った車両は少しずつ本体から離れて行った。

昨夜の総括と自己反省の末、二十数名いた乗員は片つ端から線路に投げ捨てられ、わずかに四名になっていた。

永田、森、奥平、加藤は次なる犠牲者を求めてお互いのアラを探して緊迫した状態にあつたため、車両が切り離されたことにはまったく気が付かなかつた。

「もうすぐ奉天だ。ここで観光があるらしい。駅一つ手前のあたりが張作霖爆死事件があつた橋だが、わしゃ目が見えんので、気がつかないで通り過ぎてしまうかもしれないな。」
シヨウ・チャンツーは昨夜ミサオちゃん着替えの時にアフロヘアーのカツラを逆にかぶされて目隠しされたままだったので、今朝は朝から座頭市になり切つていた。

その頃奉天付近の鉄橋では八路軍の作業員が鉄橋に爆薬を仕掛けていた。

「列車が来たのことあるよ。導火線にするは点火の用意よ。今あるよ！点火！」

火打石を激しく叩く作業員。ドドン、ドドン、ビシャー！列車は空しく通り過ぎて行った。しかも富井が使つたトイレの水をまき散らして。

「濡れてしまったあるよ。」

「あなた馬鹿ね！頭悪いの人あるよ。こうして、ホラ。簡単に火がついたの事あるよ！」

くわえていたタバコの火を導火線に押し付けたら簡単に火がついた。

「同志、あなた頭いいの人あるね。これで革命大成功のことあるよ。」

「よかつたねえ。本当によかつたねえ。あるよ。」

爆音とともに鉄橋は落下した。爆弾のそばで話し込んでいた作業員もろとも。

切り離されたコンテネルたちの車両がゆつくりと走つてきた。速度にすれば十数キロだろうか？爆破された橋の手前で止まるかなあ？止まりそうだなあ。止まれええ。あ、落ちた。

奉天に到着すると、とろろん娘はモンペの上にハトバス風制服と帽子を着用し、日航のキャビンアテンダントのようにスカーフを首に巻いて日の丸の旗を持つて立つていた。屋島君たち満鉄職員もそれぞれ車両番号が入つた旗を持つて駅前に入った。

一行は満鉄が用意した観光バスに乗り込んで駅を出発した。

「銀河鉄道ツアーの皆様おはようございます。これより皆様を乗せたバスは奉天市内の観光へと向かわせていただきます。わたくし、ガイドのとろろん娘と申します。短い間ではございますが、皆様が安全で楽しいご旅行になるよう努めたいと思います。奉天駅を出発したバスは、右に曲がつたり左に曲がつたり交差点で止まりながら、行きつくところに行くだけでございます。ええ、それでは、今から係の者が御菓子とお飲み物をお配りするようなので、しばし御歓談をお楽しみください。」

「さすが雄弁大会で優勝した人だ！心から敬服します。」

屋島君はとろろん娘の滑舌に驚愕しながら、お菓子と缶ビールの入った袋を各座席に配った。

「ガイド先生！質問であります！つかぬことをお伺いしますが、今日は清水寺には行かないですか？」

修学旅行気分です生服を着た舞子売中佐が質問をした。

「残念ながら、本日の予定には清水寺も三年坂でのお買い物も入っておりませんが、満州国皇帝、愛新覚羅溥儀さまがお住まいになっている奉天城見学の後、宮中で昼食のご用意をさせていただいております。まもなくバスは瀋陽故宮に到着します。清王朝を作った初代ヌルハチ、二代皇帝ホンタイジのお住まいでもあった建物は、満州の八つの騎馬民族を象徴する八角形の建物になっており、現代でもチャーハン、野菜炒めに見られる八角形のお皿のモチーフともなっております。それでは、皆様にはここで一時バスを降りていただき、園内見学、記念撮影のご予定がございますので、お楽しみください。」

駐車場につくととろろん娘はバスを降り、バックするバスの誘導をし、「銀河鉄道ツアー」の旗を手に行方を瀋陽故宮に連れて行くのであった。

さすが大本営、とんでもない人材を隠し持っていたと、満鉄社員の間ではとろろん娘のことが話題になっていた。あの暴れ者の舞子売中佐がおとなしくとろろん娘の言うことを聞いているので、実はかなりの高官ではないか？と噂になってしまった。

奉天故宮の鳳凰楼の前では写真屋に扮したスターキーさんがリンホフの大判カメラを三脚に固定して一行を待っていた。

各車両ごとの集合写真を写すと、側車付きバイクに荷物を積み、中野学校が用意したラポに急ぎよ駆け込みフィルムの現像をした。

「こうした写真を撮るにはカール・ツァイスのレンズよりシュナイダーレンズの方がシャープに写るなあ。」

と、ついつい趣味の方に重きを置いてしまふスターキーさんだった。

♪ 私は奉天のバス〜ガ〜ル〜発車あ〜オーライ〜。♪

とろろん娘の歌が終わる頃、バスは奉天城に到着し、ここからは辮髪頭の宮中ガイドが先頭に立って案内をした。

とろろん娘はこの辮髪が気になって仕方なかった。

宝物の見学をしているときにこそり目の前にあつた辮髪を柱に巻き付けたら、移動するときに頭からぺろりと剥がれ落ちてしまった。慌てて落ちた辮髪を拾って頭に張り付ける様子を見て、やはりこういう仕組みになっていたのか！と秘密を知った思いがした。とろろん娘が縛りつけたのはショウ・チャンツウの吸盤式辮髪だった。

満州帝国を牛耳っているのは私なんだと虎の威を借る狐の甘粕正彦は昨日、酔えば酔うほど明るくなるのを通り越して陽気になった舞子売中佐にボコにされ、顔面ぶよぶよの状態です昼食会の挨拶に立ったが、何をしゃべっているのかもわからないほどヨレヨレになっていた。

昼食会の一同が息をのんだのは満州帝国皇帝の愛新覚羅溥儀が挨拶に来たことで、これは一国の宮中晩さんに匹敵する集まりであったのだが、予算の関係で屋島君が用意できただけは歌舞伎座の幕ノ内弁当で言うなら「竹」のランクだった。

見かねた舞子売中佐が例によって例の如く、

「わしのおごりじゃー！」

と飲み物と食べ物を追加してくれたので会場は一気に盛り上がってきた。もちろん、結局、満州帝国の予算で出すことになった。

さんざんメンツをつぶされた甘粕正彦は、新京から呼んだ李香蘭を投入し「夜来香」「蘇州夜曲」「支那の夜」など一連のヒット曲を披露した。ディナーショーならぬランチショーが催された。

関東軍の舞子売と言う中佐は大したもんだと観客の評判は上がった。人間持つて生まれた器量の違いなのか？人柄の賜物なのか？どんなに努力しても自分の損得が先立つ甘粕は認められない星の下にいた。

菊宗政監督の円卓にはほおでえ看護師と帰依住職のほかにも男装の令嬢が座っていた。満州国第十四王女川島芳子だった。

「あんた、花があるでよ。日本に来てわてとこの劇団に入らんか？」
しきりに宝塚入りを勧める菊宗政監督だった。

「満湖！あんた、ああいう格好したらどやねん。あんた絶対似合うで。」
女装の男性満湖に男装の令嬢スタイルを進めるかおり姫だった。

「わしのおごりじゃー！」
と、舞子売中佐が満州帝国の予算で出した料理は「火鍋」と呼ばれる大陸式のシヤブシヤブだった。この火鍋の一種の涮羊肉(シヤンヤンロー)が京都に入り、日本のシヤブシヤブになったと言われている。

まだ獣肉に慣れていない時代の日本だから、牛や豚ならともかく、羊肉はほとんどなじみがなく、皆戸惑いを見せていた。

「羊肉なら大丈夫やでえ。これが羊で、こつちが牛肉やな。」
菊宗政監督が食べて見せ、帰依住職もほおでえさんも食べたところ、「これならいける！」と快進撃が始まるのだが、誰が先に食べるか顔を見合わせているテーブルもあった。

潜水艦の中でヤギ汁の匂いを充満させ大騒動を起こした海軍グループだった。一連の騒動の主だった富井が先に食べて見せたのだが、説博士もアンニンも顔を見合せていた。どこかにヤギ肉が紛れ込んでいたのではないのか？と疑心暗鬼だった。

誰も肉には手を付けられずに顔を見合わせていると、元海軍予科練習生だったアンニンの元に育ち盛りの武尊君が話を聞きに来て、熱心に鍋の肉を全て食べつくして帰って行った。

その頃、団体写真の撮影をしたスターキーさんは、拡大した写真から紛れ込んでいるコミンテルンを割り出していた。

赤井五平に徹マンでつぶされた清美とシオリと蓮舫は、コンパートメントで泥酔しているところを確保した。極秘裏に処分しなければならぬので、動いたのは中野グループだった。

中野グループの極秘ルートで蓮舫は国民党に身柄を預けた。中国人を裏切った中国人である漢奸(カンカン)として銃殺処分された。清美とシオリは鉄橋爆破で車両ごと転落死し

た仲間と共に河川敷で茶毘にされ、ミニディラムレアの焼き加減で川に流された。

スターキーさんの所には飛騨忍者のミサオちゃんが来ていた。まだ顔の疱疹が消えていなかったので、タヌキさんに教わった頭に枯葉を乗せて一回転する、「おたぬき変化の術」で佐々木希ちゃんに変身したのだが、日本と満州では枯葉の質が違うために庭の松の木に変身してしまったのだった。飛騨に戻ったらタヌキさんに修行し直してもらおうと誓うのだったが、すべての集合写真に松の木が写っているので少し嬉しかった。

ミサオちゃんは焼きあがった写真とスターキーさんからの書簡を持ってショウ・チャンツーが待つ奉天城にバイクで向かった。まだ水疱瘡が治りきっていないので、風が当たると顔が痛いからミサオちゃんは仮面をかぶってバイクを走らせた。

このミサオちゃんの活躍を見ていた二人の少年がいた。後に石ノ森章太郎と呼ばれる小野寺章太郎君と横山光輝と呼ばれるようになる横山光照君だった。仮面ライダーと仮面の忍者赤影はこうして生まれたのだった。

菊宗政監督たちのテーブルにいた川島芳子は

「ちよつと失礼します。」

と軍の幹部がいるテーブルに向かって歩いて行った。

「あいつ、ごつ度胸ええなあ。将校の席にいきおつたで。」

「あの背筋が伸びた歩き方は軍人さんのような気もするけれど何者かな？」

帰依住職もその後ろ姿を見守っていた。

「花があるでえ。ごつつ花があるでえ。あ、李香蘭が来たで。」

菊宗政監督は宝塚の演劇に使えそうな物語が見えてきた。

「皆様おひさしゅう。山口さん、久しぶりですね。」

川島芳子は李香蘭に一礼した。将校たちも奉天城の中では気軽に「川島君」とは言えず、

「王女様。こちらにいらしていたのですか。」

と、皆起立して敬礼をした。

「将校が立ち上がったって敬礼しとるで。ほんま何者なんや？」

「川島芳子さんって言うたよね。どこかで聞いたことがある名前なんやけど。」

ほおでえさんも雑誌かなにかで見たことがある名前だったが、基本的にイケメン男優しか興味のないおばさま達だったので、女性の名前は憶えていない三人だった。

「奇遇ですね山口さん。日本人でありながら支那人として活躍しているあなたと、満州人でありながら日本人として生きている僕。同じヨシコでも僕たちは正反対ですね。」

川島芳子と李香蘭(山口淑子)は時代を象徴する二大ヨシコと呼ばれていた。

「これに櫻井よしこが加われれば三大ヨシコだな。」

東条英機が言うのと、将校たちは口をそろえて

「そのよしこはもつと後の時代に出て来ます。」

「今はまだ生まれていないと思います。」

「その頃には閣下は死刑になってこの世にいません。」
とたしなめた。

川島芳子と李香蘭は空いた椅子に座ったが、ひとつはとろん娘が座っていた席で、隣には阿保野論氣二等兵が座っていた。その左隣は舞子売中佐の席だったが、とろん娘を連れて酒をふるまいにまわっていたので、李香蘭が腰かけた。

その威圧感に阿保野論氣二等兵は目の前にある鍋に手を伸ばしたいのだけど、手を出せない。王女と大スターに挟まれ非常に厳しい立場に立たされていた。何とか意を決して饅頭に手が届いたが、目の前でグツグツ煮えている火鍋には届きそうもなかった。

「山口さん。君は今の自分の生き方に疑問を感じていないのかね？」

「これが天命ですもの。何の疑問もないわ。」

「そうか、僕は誰かの道具でしかない生き方に納得ができないんだよ。」

これだけ煮え立っている鍋に肉を入れない、あなたたちの生き方が納得できないと阿保野論氣は思った。あ、スープが蒸発していく。

「どういえば、川島さんは大きなお怪我をなさったそうですね。」

将校の一人が話しかけた。今がチャンスだ！阿保野論氣は視線がそちらに向かった瞬間、牛肉を火鍋でシヤブシヤブした。

「どこから情報が入りました？お耳がお早いこと。幸い、大したケガではなかったし手当が的確だったからもう大丈夫です。あ、君。僕がとつてやるよ。」

川島芳子は火鍋に肉を入れて阿保野論氣に取り分けてやった。左隣の李香蘭は阿保野論氣のグラスにビールを注いだ。

警護のために会場を巡回している未造技師はその現場を見て、あの二等兵は大きな武功をあげたさぞや名のある武将に違いないと確信した。

童話作家のナオコさんと。パッパラおばさんがバルナックライカを手にしたカメラマンのスターキーさんを連れて、川島芳子たちの所にやつて来て、一緒に写真を撮ってほしいとお願いしたら、李香蘭も承諾してくれた。この千載一遇のどきどきに阿保野論氣二等兵は鍋に肉と野菜を投入した。

「三、二、一！ハイ写しました！」

スターキーさんの声に撮影は完了。斜めに立つ川島芳子、ナオコさんと。パッパラおばさん、その肩に手を回す李香蘭。その背後に火鍋に憑りつく阿保野論氣と、笑顔の東条英機が写っていた。

川島芳子が席を立ったほおでえ看護師たちのテーブル付近にはいつの間にか女性たちが集まって世間話の輪ができていた。今夜は奉天のホテルに泊まるのだが、満州の戦況などを聞く集まりがあるため、成人男性たちは夜に勉強会が行われる運びとなっていた。

「どうせ今夜は市内のホテルで暇なんやし、どこぞで女子会しようやないか！」

かおり姫の提案に女性たちが乗り気になり、奉天女子会が開催されることとなった。

「あいつが一番気が弱そうや！」

と満鉄職員の屋島君が捕まり、胸ぐら捕まれて友好的な交渉の上、ホテルに女子会の会場を用意させることとなった。

ランチ会の会場の女性たちがまだ耳慣れぬ「女子会」の話題で盛り上がっている中、じつとしているようなかおり姫ではなかった。

「マル、まだ宴会続きそうやし、お風呂でも行かへんか？」

温泉旅館じゃないのだから、満州帝国皇帝のお城に大浴場なんかあるわけないのに。あつた。何事も試して見なけりやわからないもんです。

大浴場の入り口には女官が番をしていた。かおり姫とマルさんを見つけると、満州語で何か言ってきたが、二人には何を言っているのか？皆目見当つかなかった。

「おばちゃん、よう来てくれた言うて喜んでほるで。」

「かおり、あんた第二外国語は中国語やつたもんな。」

支那大陸の歴代皇帝の宮中ではその民族の言葉を使うので、元ならモンゴル語、満州族の清朝は満州語、もちろん満州皇帝のお城でも満州語。いわゆる中国語が使われた王宮は案内外少ない。

「おばちゃん、ご苦労やな。あ、バスタオル借りてくでえ。ほなな。」

女官は二人の後ろ姿に向かつてまだ何か言っていたが、

「お風呂の入り方を言うてはんねん。私らを誰やと思うとんねん。日本人やでえ。」

「せやな、支那人は風呂なんかよう行かへんもんなあ。」

女官のおばちゃんが言うことによ。

満州皇帝には平たく言えば妾に当たる側室が何人もいたが、その側室間でも激しいライバル蹴落とし合戦が来る広げられていた。

その日、皇帝の御寵愛を賜る御使命を受けた側室が、この大浴場で侍女たちに今で言うエステを受けて美しさを磨いていたが、その侍女たちは別の側室の息がかかった者たちであった。あえなくその若い側室は侍女たちによつてこの大浴場で殺害され、以後、開かずの大浴場となつて入浴する人が誰もいないお風呂であった。

関係者以外立ち入り禁止の看板がかかっていたが、

「私ら招待客やもんなあ。」

と、堂々と入っていく二人であった。そのあまりの堂々とした姿に、「皇帝陛下の新しい側室の方かしら？」と、何も言えなくなつてしまった女官のおばちゃんだった。

「ゴージャスやなあ。大江戸温泉よりおつきいでえ。」

「かおり、見てみい。赤いお湯やで。鉄分が豊富な温泉なんやなあ。」

言い忘れたが、側室が惨殺されて以後、風呂のお湯が赤く濁るようになったと言う。

真つ赤なお湯の大浴場で、ご機嫌の二人であったが、

「マル、見てみい。けつたいなねえちゃんがおるでえ。さつきからずつと髪を洗つてはる。」

大浴場の薄暗い洗い場で、ひたすら長い髪の毛を洗っている女がいた。

「きつとあれやで、ヤギの肉を食うてしもたんやで。」

「あれ、ごつごつ臭い言い寄つたもんなあ。」

「犯人は富井や!!」

「ご機嫌で大浴場を満喫して風呂を出る二人であったが、髪を洗う女は一人が出る時마다髪を洗い続けていた。」

「おばちゃん、まだ中にけつたいなねえちゃんが入つとるんねん。まだ髪を洗っていたから、出てくるのはしばらく後や思うねんけどなあ。」

大浴場の照明を消そうとした女官にかおり姫が伝えたが、女官は何も言わず照明を消してしまった。

「ええ風呂やったなあ。みんなに教えたつたらよかった。」

「せやなあ。でも、もう時間がないしなあ。」

二人はちよっぴり得した気分になっていた。

奉天に妖しい暗雲が立ち込めてきた。

シヨウ・チャンツーは風魔忍者のマチ姐さんと飛驒忍者のミサオちゃんに指示を出した。

女性たちが集まって女子会の相談をしている時、誰もいないテーブルで鍋をむさぼり食べる男がいた。

獄門島から戻ってきた秋田のネロさんだった。